

1945年にユネスコ憲章が採択されて以来、
ユネスコは教育・文化・科学・コミュニケーションの
発展と推進を担う国連の専門機関として、
世界平和構築のためのさまざまな取り組みを続けてきた。

1999年にアジア人として初めて
ユネスコ事務局長に就任し、
10年間にわたって多くの課題解決に
尽力したのが、松浦晃一郎氏だ。

松浦氏は就任後、ユネスコの組織改革に尽力。
無形文化遺産保護条約や文化多様性条約の
採択、ドイツ・ポーランド統一教科書の作成、
初等教育の普及による貧困の撲滅など、
数多くの成果を挙げてきた。

学長 立石博高対談

文化の多様性こそが人類の宝

世界のグローバル化が進み、
国際情勢が混迷を深める中、
国際社会はどのような課題に取り組んで
いかなければならないのか。
また、多文化共生の時代に
グローバル人材として活躍するためには、
どのような資質が求められるのか。
松浦氏にお話を伺った。

文・吉田耀子 写真・竹井俊晴

Hiroataka Tateishi

ゲスト

松浦 晃一郎氏

前ユネスコ事務局長

Koichiro Matsuura

まつうら こういちろう

山口県出身、1937年生まれ。
東京大学法学部在学中に外交官試験に合格し、
1959年外務省に入省。
駐フランス大使や世界遺産委員会議長、
ユネスコ事務局長を歴任。
現在、公益財団法人日仏会館理事長、
一般社団法人アフリカ協会会長、
株式会社パソナグループ社外役員、
立命館大学特別招聘教授。

立石博高学長(以下、立石) 今年は戦後70年ですので、平和について、あらためて考える時期ではないかと思えます。松浦さんは1999年から10年間、ユネスコ(国際連合教育科学文化機関)事務局長として大変な活躍をされました。ユネスコ憲章の前文には、「戦争は人の心の中で生まれるものであるから、人の心の中に平和の砦を築かなければならない」という有名な言葉があります。日本ではユネスコという「世界遺産」のイメージが強いのですが、今日はユネスコ全体の取り組みについてお話を伺えればと思います。

文化の多様性を維持し 互いに理解を 深めることが大切

松浦晃一郎氏(以下、松浦) ユネスコの歴史は1945年11月、ロンドンの国連会議におけるユネスコ憲章の採択を起点としております。第2次世界大戦直後、連合国と知識人は、国際連盟の失敗にかんがみて、国際連合本体は政治・軍事などのハードパワーをつけるべきだと考えました。しかし、それだけでは戦争を未然に防ぐことはできないから、ソフトパワーを強化することも重要だと考えたわけです。ソフトパワーの中でも重要なのが、「教育」「文化」「科学」「コミュニケーション」の4つ。これらを担当する国際機関が必要だということで、ユネスコが誕生したのです。

日本ではユネスコといえば世界遺産と

いう感じですが、予算や人的な面でユネスコが一番力を入れているのは、実は「教育」なんです。ただし、「教育」の国際交流には何かと難しい面があり、目に見える成果が出にくい。

一方、「文化」のほうは成果がはっきりしています。世界遺産条約の対象となるのは文化遺産と自然遺産ですが、従来のは文化遺産が中心だったんですね。それでは不十分だということで、「無形文化遺産」というカテゴリーを新たに作り、日本からは能楽や文楽、歌舞伎などが登

ソフトパワーにより 「心の中に平和の 砦を築く」

松浦



録されました。

しかし、無形文化遺産を新たに加えるにあたっては、西欧諸国からの強い反対がありました。「人類の文化遺産とは歴史的建造物と遺跡に尽きる、あとはそれに付随するものだ」というのが西欧の考え方なんです。だから、彼らは、独立した無形文化遺産の条約を作ることには反対だった。しかし、ユネスコ憲章の前文にある「心の中に平和の砦を築かなければならない」という文言は、「文化を広く解釈しないといけない」ということを意

味しています。

立石 松浦さんは、文化というものは2つの面から考えなくてはいけない、と言っておられますね。

松浦 私どもは「文化」を、芸術的な価値のあるものだけに限定しているわけではありません。人々の考え方や生活様式全体を指して「文化」と言っている。それならば、当然、無形文化遺産も世界遺産条約の対象とするべきなのです。

立石 ユネスコ憲章の前文には、「相互の風習と生活を知らないことは、人類の歴史を通じて世界の諸人民の間に疑惑と不信を起した共通の原因である。この疑惑と不信のために、しばしば戦争が起った」という一文があります。美術や音楽は狭義の「文化」、相互の風習や生活は広義の「文化」と考えてよろしいわけですね。

松浦 まさに、そこが鍵なのです。ユネスコ憲章ではそう書いていながら、実際の条約では「文化」を狭く解釈している。世界遺産条約が採択されたのは1972年ですが、80年代以降、専門家の中で「文化をもっと広く捉えるべきだ」という意見が出てきました。私がユネスコ事務局長に就任してから2年後の2001年、パリで開かれたユネスコ総会では、「文化の多様性に関するユネスコ世界宣言」を採択しています。その第1条に「文化の多様性は人類の宝である」という一文があります。ここで言う「文化」とは人々の生活様式を指しています。

一方で、伝統的な文化を保護すると同時に、新しい文化を作っていくことも重

要です。2005年の「文化的表現の多様性の保護および促進に関する条約(以下、文化多様性条約)」の採択に先立ち、2004年には私がイニシアチブをとって、「創造都市ネットワーク」を立ち上げました。これは、文学・映画・音楽・工芸・デザイン・メディアアート・食文化の7分野から世界でも特色ある都市を認定し、互いに連携しながら新しい文化を作っていくことを目指すものです。

大事なことは、過去の文化遺産をしっかり保全していくと同時に、それを踏まえて新しい文化を作っていくこと。その上で交流を進め、お互いの理解を深めていくことなのです。

立石 しかしながら、20世紀末にグローバル化が進むにつれて、異質な文化が接触して摩擦を起すケースが増えています。一方では文化の普遍性を掲げながら、他方では「固有の文化を大事にしろ」と言う。多文化主義と普遍的な文化という2つの価値観を巡って、常に軋轢が生じてきたわけです。

松浦 ユネスコの基本的な考えは、「現在ある多文化の世界をしっかり保全していく」ということです。つまり、文化が一元化され、世界全体が1つの文化になっってしまうような事態は避けなければならない。典型的な例は「言語」です。かつては約1万種類の言語があったといわれます



が、現在では約6000種類まで減っています。先住民の言語がどんどん失われ、その文化も消えつつある。

こうした言語と文化をしっかり保存しつつ、互いに文化交流しながら理解を深めていくことが重要です。

「文化の多様性は人類の宝である」、ただし、異文化が共存する時には問題も生じるので、交流を深めつつ、多様な文化を維持するよう努力しなければならないということなのです。

立石 「文化多様性条約」では、「諸民族



インター カルチュラルリティが 平和構築の鍵

立石

の間に架け橋を築くべく、文化的な相互交流を発展させるために、インターカルチュラルリティ(Interculturality)を育成すること」が謳われています。このインターカルチュラルリティという言葉は、なかなかよい日本語が見つからないのですが、私は「異文化理解」「多文化共生」のことだと考えています。多様な文化が互いに衝突している中であって、どうすれば互いの文化を尊重し、共存を図っていくのか。そうしたことを考える上で、インターカルチュラルリティという概念は、

大変重要な意味を持つように思うのです。松浦 おっしゃる通りです。今、世界では、宗教という次元でさまざまな衝突が起こっています。暴力によって相手の文化を蹂躪するようなことは、決してあってはならないことです。自分たちの文化も相手の文化も大切にしたいので、互いの存在や考え方を認め、交流を深めていくのが基本。そのことを、世界の皆さんに考えていただきたいですね。

初等教育の普及により 世界の貧困が半減

立石 ヨーロッパでは、国内にさまざまな民族や宗教を抱えているケースがほとんどです。スペインでも人口の15%は外国生まれの人たちです。多様な文化は現に存在しているし、それを守っていくかなければ、国としても成り立たない。

松浦 先住民の文化を大事にしなければならぬのは、日本も同様です。1899年(明治32年)に「北海道旧土人保護法」が制定され、アイヌ語やアイヌ名の使用が禁止されました。この法律が1997年まで残っていたというのは、驚くべきことです。2009年にアイヌ古式舞踊がユネスコ無形文化遺産に登録されましたが、アイヌの方々はそのことを大変誇りにしています。一生懸命アイヌ語を勉強しているという、若いアイヌ人女性にも出会いました。かつてはアイヌ語を学ぶことさえ禁じられていたわけですが、今、ようやく誇りを持ってアイヌ文化を守っているようになった。もつと

早くやるべきだったと思えてなりません。立石 ユネスコでは、教育の中で、できるだけ母語を学ぶという取り組みを推進しておりますよね。

松浦 ええ、それがまさに当てはまるのが南米です。南米は多民族国家で、ブラジル以外ではスペイン語が唯一の共通語です。しかし、南米では今も先住民の言葉が生きていて、先住民が大きな力を持つ国と、スペイン系住民が力を持つ国があります。

例えばパラグアイでは、グアラニーと

いう先住民族が人口の25%を占めているため、スペイン語とグアラニー語の2つを公用語にしました。ところが、残り75%の人々は他民族の言葉を学ばなければならず、これに抵抗する動きが出ている。そこが難しいところですね。

立石 理念的には、共通の言語と多様な言語の両方を大切にしなければならぬ。しかし、小さな国がこうした政策を進めるには限界もあるので、国連が働きかける必要があるわけですね。

松浦 大切なのは、各々の民族の言葉を、



国際機関で働くためには 学問的教養と 幅広い見識が必要

インドからの依頼で統一教科書を作ったことがあります。ユネスコが中心となり、ドイツとポーランド、第三国の専門家を投入して作業を進めたのですが、これはかなり成功しました。ドイツとポーランドは、統一教科書作りを通じて歴史認識の共通化を図ったわけですね。

その後、韓国と中国からもアブローチがありましてね。ドイツとポーランドの例にならって、日中韓3カ国の教科書の共通化をぜひユネスコで手がけてほしいという。ところが、日本が反対したんですね。日韓2カ国では統一教科書作りが行われましたが、肝心な部分ではできなかった。ユネスコが入ることによって成功したかどうかはわかりませんが、そうした試みを始めること自体に意味があったのではないかと思います。

私が1999年11月にユネスコ事務局長に就任して以来、特に力を入れたのは「途上国の教育水準の向上」です。2000年4月に開かれた世界教育フォーラムで、ユネスコが中心となって6つの目標を採択しました。このうち2つが、同年9月に国連で採択されたミレニアム開発目標に盛り込まれたのです。

「ミレニアム開発目標では、「極度の貧困と飢餓の撲滅」をはじめとして8つの目標が掲げられました。その2番目に「すべての児童が基礎教育を受けられるようにすること」、3番目に「教育における男女格差の解消」が盛り込まれました。当時、極度の貧困層の数は12億人でしたが、初等教育が普及した結果、今ではほぼ半減しています。

立石 教育がいかに大きな力を持つかということが証明されたわけですね。素晴らしい成果を挙げられたことに感服しております。最後になりますが、本学は、国連や外務省、JICAなどの国際機関を志望する学生が多いのが特徴です。大学時代にどのような勉強をしたらいいか、どのような体験をするべきかアドバイスをいただけますか。

松浦 受験勉強をしっかりとやることも大切ですが、長い目で見て重要なことは、世界全体の流れや、世界が抱えている問題、その中で日本がどういう役割を演じていかなければならないのかという点について、自分なりにしっかりと考えたことを持つことです。

立石 自分が取り組んでいる分野の学問的素養を高めると同時に、ものの見方や考え方を身につけなければならぬということですね。

松浦 国際機関で働く場合は、現時点での問題を理解するだけでなく、世界史をしっかりと学ぶ必要があります。世界全体の歴史とアジアの歴史、日本の歴史を理解する。そして俯瞰的な視点を持った上でしっかりと勉強することが大切です。

立石 世界でリーダーとしての役割を果たしていくためには、しっかりと教養、特に歴史についての知識が必要だということですね。



大切なのは、 異文化への 理解を互いに 深めること

松浦

学校で学べるようにしていくことです。東アフリカでは、スワヒリ語が徐々に共通語として使われるようになってきています。スワヒリ語は人工的に作った言葉で、タンザニアやモザンビークではかなり普及しています。ただし、スワヒリ語の普及にあたっては、矛盾のないわけではない。タンザニアの教育大臣から聞いたのですが、「自分は家で部族の言葉、学校で英語を学んだ。ところが、女房はほかの部族の出身なので、家ではスワヒリ語で会話している。子どもたちは学校でスワヒリ語と英語を勉強するので、部族の言葉を知らない」と言うのです。これは、スワヒリ語が広まることによるブラスマイナスです。部族の言葉がスワヒリ語に押されて廃れてしまうというのは、ユネスコの考え方から言えば、けつして望ましいことではありません。

立石 そういふ言語圏の問題は、いろいろな問題が重なり合っているから、丁寧に見ていく必要があるでしょうね。

ところで、ユネスコは教育に注力しているそうですが、具体的にどのような点に力を入れているのですか。

松浦 ユネスコが発足した当初は、各国の教育制度の見直しやレビューを行って来ました。ところが、教育とは各国の主権に関わる重要な部分ですから、先進国の間では、ユネスコが教育に介入することを歓迎しないムードがある。このため、現在は教育交流は行っているものの、具体的な教育内容についてレビューするのは難しいのが現状です。

ユネスコは80年代に、ドイツとポーラ



世界で活躍する ためには、歴史の 知識が不可欠

立石

松浦 もう一つ大切なことは、自分の得意な分野に精通することです。例えばユネスコなら、初等教育あるいは職業教育、高等教育、識字教育など、何らかの専門分野を持つ。全体像を理解するだけでなく、縦に深く専門分野の知識を掘り下げていく必要があります。一方で、幅広い知識がなければ、専門分野の仕事を本当にこなすことはできない。横の広がりも縦の掘り下げ、その両方が必要になってくるわけですね。

立石 ものの見方としてだけでなく、学問分野でもグローバルとローカルの2つがあるわけですね。東京外大もそこに近づけるよう努力したいと思っています。

松浦 東京外大は専門地域でもいいと思います。例えばフランス語圏では、最近、アフリカの重みが非常に増えています。アフリカのことをやるためには、フランス語をしっかりと学ばないといけない。スペイン語もラテンアメリカがありますから、非常に対象が広いですね。

立石 本学では3年前、国際社会学部にアフリカ専攻を作りました。ここでは、英語とともにフランス語やポルトガル語、スワヒリ語などの地域言語を教えるながら、言語教育と地域教育を行っています。

松浦 スワヒリ語が広がるのはありがたいことです。スワヒリ語を勉強すれば、東アフリカの広い範囲の人と交流ができますからね。

立石 ぜひ、アフリカ方面でも活躍できる人材を育てていきたいですね。私どもも精一杯頑張っておりますので、ぜひご支援いただければと思います。■

1976年東京外国語大学外国語学部スペイン語学科卒業、78年東京立大学大学院人文科学研究科史学専攻修士課程修了。同志社大学商学部助教授を経て、92年から東京外国語大学に在籍。2013年4月より学長就任。著書に「スペイン歴史散歩―多文化多言語社会の明日に向けて」(行路社)など。

